

飛鳥せきの魂が証した 文字的现实

一二月八日といえば、お釈迦様が觉悟された日として、仏教界の各所では成道会じやうどうえが行われることで広く知られている。昭和六二年の当日のこと、二人の女性が、法要に参加するため東京都下に向けて自家用車で出発したのは夕方のことであった。

二人は縁あって私の妻とも親交を続けていた。出発に際して妻は、万一不足したときに役立ててくださいと言ってお金を手渡した。

「このお札には飛鳥せきという霊能者の魂がこめられており、何かにお役立てくださいと言われて私が親族から預かったお金です」と、妻は二人に念を押して手渡したのであった。

初冬といっても日中は晴れ渡るよい天気恵まれ、夜になってもうっすらと雪の気配があるくらいで心配することもなく車で出かけたのであった。往復八〇〇キロほどの道

程である。

ところが、日付が翌八日が変わった深夜二時くらいのこと、布団の中でなんとなく目が覚めかけた私は「うわー」「うわー」という女性の声をふた声聞いたのである。

その叫び声は鮮やかに耳元に残った。その瞬間、前夜出発した二人のことが気になり、事故にでもあったのではないかと、全身に冷氣が走った。

一体どうしたことだろうか、とその叫び声が離れずしばらく寝つくこともできなかったが、やがて夜も明けて朝を迎えた頃、二人から連絡が入って、無事に到着したことを知らされた。

あの声はいつたい何だったろうか、単なる幻聴ということなのか、と思ってもみたが、いつしかそのことも忘れてその日は過ぎた。

成道会も無事終えて、二人が都下を出発したのは夜の六時過ぎである。日付が九日に変わった早朝の四時ころ、耳元深く微かにひびくベルの音は、眠気に消されて遠くなり、近くになりながら鳴っている。次第にはつきりと目が覚めて、「まさか!」という思いが走ったときにはベルが止んでいた。

二度目のベルが鳴り出したのは五時頃のことである。再びまさかと思いつつ、階下に

走り降りて受話器を受けると、

「事故を起こした…」と、弱々しい女の声が目元に突き刺さった。場所はどこかと聞くと、

「飛鳥あすかの所で堰せきに落ちた」

と言ったのだ。

「え、飛鳥のせき！ “飛鳥せき” か！」

と絶句した。

夜を徹して交替しながら走り続けて、あと一五キロくらいで到達できるという地点で事故を起こしたのである。

幅約二メートル、深さ約二メートルくらいの堰せきに垂直に落下したごときはまって車は大破。二人の生命には別状なく、わずかの擦過傷と打撲で済んだ奇跡的な事故になった。

二人の話から意外な事実が分かった。昨日の法要に参詣するとき、所持金のお札が汚れているからと、妻から預かった飛鳥せきの、折り目のないきれいなお札を抜き出してお供えしたというのだ。

あれほど念を押されていたことはすっかり忘れて、自我の面目を立てたのである。

「万二不足のときは役立ててください」と妻に言われた飛鳥せきからの真心の約束を破り、面目を第一に考えた二人が飛鳥村の堰に引き込まれたという現実は、靈魂不滅の生きて働く証しともなった。亡き魂の愛の実在を示すこととして、心の引き締まる思いになる。

靈能者、飛鳥せきは、旧姓が高橋で、最上郡赤倉に出生し、向町の飛鳥姓の夫に嫁いでいる。飛鳥姓のルーツは、飽海郡飛鳥郷（現在の酒田市飛鳥）から開拓のため入植したことが始まりと聞き及んでいる。

二人が落下した場所はまさしく“飛鳥の里”の中央を流れる堰なのである。

靈魂は現実世界で、われわれ肉体生命の中で、このようにして文字的ひびき、数字や色彩を媒体にして、その存在を明らかに示すのである。煙になつてどこかに消えて無くなるという便法は成り立たない。みんなの潜在意識層の中で活躍しているのである。



天から降ってきた鯉

鯉が天から降りてきた

天は晴れ渡り雲一つなく、草木は緑に映えて静かな日和であった。四枚のガラス戸を開き、ときどき庭に目を移しながら二人は話に花を咲かせていた。突然、目の前に異変が起きた。

妻と客人はそのとき、鯉のぼりの話をしていた。目の前で「ドス」と鈍い音がしたのである。それ以外に音らしい音は何一つない。きつと何かが落下した音であろうと、庭の鉢植えのうしろの雑草の中を覗いてみた。音の正体はすぐにわかった。十五センチくらいもある大きな魚が、白い腹を見せて横になっていたのである。

家には池などない。フナともコイともつかない川魚である。天から落ちてきたことだけは明白である。あの「ドス」という鈍い音からして、相当に高いところから落ちてきたのであろう。とすると、トンビかカラスのしわざだろうか。きつとそれに違いない。

半世紀以上生きてきたが、こんなことは初めてである。妻は鯉だと言う。鯉のぼりの話の最中に天から鯉が降りてきたのは、何としてもでき過ぎである。恋コイに落ちた二人カ などという駄洒落の話ではなく、鯉のぼりの話のとき、鯉が本当に天から降りてきたのである。

紛れもなく天の声であり、魂不滅の共振共鳴の実演であろう。それは平成三年六月七日金曜日午前一〇時頃の話。

天空を舞う鳥に同化できるのは、魂以外にない。鳥と同期できるレベルは、いのちの次元に立つほかないのである。

いなだま
稲霊の喜びが開花した
いのちの証し

平成七年九月一六日、長野県中野市の中山晋平記念館を訪ねた際、記念館前の田んぼで稲刈りをする農人に頼んで、二束の稲をいただいた。

めっきり目立つようになった減反田の自生稲や、昔ながらの農人魂が光る米作りに、異常なほど心を引かれる私は、雨の中で、コツコツ稲刈りに励む目の前の農人の稲が欲しかった。

農人の名は、田川功さん。

翌年私が、うるち米「亀の尾」の苗（創始者、阿部亀治の子孫より受けた苗）を段ボール箱で送ったところ、田川さんは、立派な稲に育ててくれた。

秋の収穫も終えた田川夫妻は、旅行者者に頼み、二泊三日のプログラムで東北の旅に出ることになり、その時、元気な根の付いた「亀の尾」の稲束を、忘れず持参したので



目前に現れた「92-73」の車

「六時一八分だ、誕生日だ、今日だ！」と叫んだ。今日は六月一八日で女性の誕生日とぴったりなのである。私はその車にぐんぐん近づいてカメラのシャッターを押した。

正しく天意の道案内というほかはない。命数で示したいのちの意志は無二唯一の命数であり、数字というものは、いのちに直結する意志性のひびきでみち溢れ、この世に偶然という一過性の現象は煙となって消えていく。

数的表現の意味することは、いのちの中心エネルギーに直結した根源的言葉のひびきをもつものだ、私は信ずるようになった。



亀の尾の里帰り

四月一六日だ……」
 と、田川さんは言い出した。そして

「ウン、ウン……やっぱりな」と頷きながら、
 「うちの娘も同じ日だったな」と不思議そうに言った。田川さんの愛娘は、本名も、愛である。
 昭和四一年一月一六日生れで
 平成元年四月一六日に結婚
 していることがわかった。なるほど、そうか……と頷く
 私に、彼は、再び、
 「俺の親爺も同じ日だよ……」
 と言う。
 父親は、昭和五年四月一六日に結婚しているというのだ。



亀の尾の稲穂と亀屋ホテル

ある。
 ホテルで待ち合せすることになったが、そのホテルがこれまた、「亀屋」というではないか。「亀の尾」の縁が実って泊ったホテルが「亀屋」とは、稲の魂が働いたというほかない。
 元気に育って里帰りをした亀の尾を中にして、喜びの話題はつきなかった。この稲束で結ばれた両者と、亀の尾の一連の話を、信濃毎日新聞は、二度にわたって紹介してくれた。
 ところが、記事になった縁のエネルギーの強さに心を引かれ、田川さんから、取材記者のことを訊ねても
 らったところ、昭和二年四月一六日生まれだという。また、田川さんは、昭和一二年
 一月二五日生まれ、奥さんは、昭和一六年九月四日生まれであることを前に伺っている。
 「彼（記者）は、四月一六日生まれか、俺も初めて知ったよ、そういえば、俺の結婚は

取材記者は、“四月一六日”生まれ

田川功の父は “四月一六日”に結婚

田川功も “四月一六日”結婚

娘の愛もまた “四月一六日”結婚

奥さんは 昭和 “一六年”生まれ

娘も 一月 “一六日”生まれ

と、次々、“四一六と一六”数霊が出現することになった。

さらに、田川さんと私たちがご縁になったのは、

平成七年九月 “一六日”

のことであった。

まさに、米の魂が（稲霊）が、日本全土から寄り集まって、田川さん一家を祝っているようだ。

“一六”という数霊の波動は、米の心性波動を象徴する一形態であると思っている。

米的表現では、昔から、八八歳の米寿といわれ長寿の祝いとして喜ばれてきた。

日本民族の魂には、心の共鳴磁場として、八八歳の米寿は深く刻まれていることでもあ

る。

その和数“一六”（八八＝一六）は、米のいのちの収束されたエネルギーの一つとして、シンボライズされていると考えてもいいだろう。

記者と田川家と私たちのラインには、稲霊（八八＝一六）を共鳴媒体とする“心の共鳴情報磁場”が確立されていたと考えていいだろう。

田川家では、昔も今も変らぬ手作業を基本として、畦畔は鍬で塗り固め、苗は手植えをして、収穫した稲は、ハゼ掛けをして自然の風で乾燥かんそくするという真心の作業を守り続けている。

そこから伝わってくることは、米のいのちとぴったりの自然感だ。

人間の真心とともに、いのち全開した米のいのちは、人間の魂と同化して、いのちの根源力となって、明るくひびかせることになる。

普賢岳に抱かれたご夫妻

この地上で健康体で生きていくには、炉に溜まった滓を掃除する必要があるように、体内で燃えたいのちの滓を排出しなくてはならない。それを四文字で表せば「新陳代謝」という働きになるであろう。

機械や道具類なら、維持管理することがそれらを長く使用に耐えられるようにする必須条件である。ましてや、有機体のわれらのいのちを円滑に持続させるためには、それなりの維持管理が当然必要となる。すなわち、健康管理である。

いのちはリズムカルに呼吸している。肺を使って体外から天の気を呼吸し、体内では、毎日欠かせない食事から地の気を呼吸する。

これらの呼吸は、目には見えないが、全身六〇兆以上ともいわれている体の細胞一つひとつが生きるためのエネルギー供給源となり、それを受けた細胞は、そのエネルギー

でいのちの呼吸をしている。

吸っては吐き吐いては吸う呼吸は、ミクロ世界の生死を司る営み。これを「代謝呼吸」と私は呼んでみた。

このように、体外呼吸と体内呼吸がリズムカルに働くことによって、私たちの生きる土台は維持できている。

生命誕生の母体であるわれらの地球生命ももちろん呼吸をしている。宇宙を一体の生命体とした宇宙生命が呼吸するのも当然であろう。

地球が億万年単位の寿命を維持するために、それ相応の新陳代謝があるのは当然のことである。その最たる現象が火山噴火・地震・台風・雷鳴などであろうし、そうした自然現象のあらゆる面で、それらが地球生命にとつての健康維持となるであろう。そう考えることによって、たとえ私たちにとっては恐ろしい自然災害も、地球生命にとつては健康法の一つだということが分かる。地球生命が円滑健全であればこそ、私たちのいのちは安全無事ということになる。

われわれにいのちがあつて地球にはいのちがないと誰がいえようか。ましてやわれわれは死んで煙となり、白骨となって地球母体にUターンする宿命を背負っている。新し



平成3年6月7日付、山形新聞朝刊を転載

く生まれ変わるための元の姿、すなわち生命元素に戻ることが、死という扉開きといえる。

最初の代謝呼吸を“生”としたら、最後の代謝呼吸は“死”である。死んで、いのちのリニューアルともいえる世界で一新され、再利用される日まで元素の姿で地球母体に抱かれていることになる。

こうしたわれわれのいのちと、母なる地球生命と宇宙生命という考え方からいえば、この世は、いのちの代謝呼吸の息吹で満ち溢れている。その最たる現象を火山噴火に見ることが出来る。

生命母体の地球が、まるで内圧を調整するように安全弁を作動させている姿が火山噴火や地震などの現象だと捉えるなら、地球生命の息づかいが、美しくも神々しく、その燃え上がるいのちの躍動が心の目に映し出される。

火山噴火は世界各地で、生き生きと激しく呼吸をしている。それは、いのちの営みであり、地球母体が生きている証しでもある。

燃え上がる溶岩と水蒸気を噴き上げる生きた火山に強烈に魅せられ、その一生涯を火山現象学に捧げたご夫妻がおられる。

モリス・クラフト（四五歳）
カティア・クラフト（四四歳）

このクラフト夫妻の足跡は、火山研究に不滅の金字塔をのこしてくれた。

クラフト夫妻は、アメリカの火山学者仲間からは「火山の鬼」という異名で呼ばれるほどで、噴火を知ると世界中どこにでも出かけていき、いち早く現場に分け入ったそうだ。

クラフト夫妻は、噴火活動を直接その目で観察して行く研究の専門家であった。いつも一緒に行動する中で、危険な現場にひるむこともなく、身を挺して貴重な映像を残してくれた。

夫のモリスさんはフランス人で、一九四六（昭和二一）年三月二五日、医者の子男として生まれた。子どもの頃、家族でイタリアのエトナ火山やストロ

ンポリ火山などを訪ねたときの感動が、彼を地質学・鉱物学へと向かわせ、ストラスブール大学に学んだという。

妻のカティアさんは、やはりフランスに生まれ、十代のときに訪ねたイタリアの火山の驚異に魅せられたことがきっかけとなり、やはりストラスブール大学で地球科学の道へと進んだ。ここで夫となるモーリスさんと出会うことになり結ばれたのである。

クラフト夫妻が、最後の足跡をのこした火山噴火の国は日本であった。長崎県の雲仙普賢岳で、一七九二（寛政四）年の噴火大崩落から一九九年目となる一九九一（平成三）年五月二四日朝、激しい噴火が起こり溶岩の崩落が始まった。

それを知ったクラフト夫妻は、米国人研究者ハリー・グリッケン（三三歳）とともに五月二九日に島原市に入り、そして翌六月三日午後四時九分、発生した大火砕流に巻き込まれて、帰らぬ人となったのである。

それからちようど一月後の七月三日、私は、一本のVTRを見ながら一つの運命的共時性に気づいた。

生前、クラフト夫妻が発した言動には、予知・予言性が内在していて、確固たる現実性が秘められていたのである。

クラフト夫妻は、それまで二〇年間、一二〇回にもわたり活火山に近づき、火を噴き上げる生きた火山にこそ最大の興味を持って引き付けられたという。夫のモーリスさんは、

「火山の噴火で生命を失うのなら本望だ」

と話し、妻のカティアさんは「一四歳」のとき火山学者になることを決意され、雲仙普賢岳の印象を記者に聞かれると、

「この山がとても気に入りました」

と笑顔で答えていたそうだ（山形新聞・平成三年六月七日）。

そして夫妻は、身命をこの普賢岳のいのちとともにし、四一人の死者行方不明者とともに、予言的暗示性の命の運びとなったのである。

一四歳（一四一）のとき火山学者を決意し、四一人の命とともに普賢岳に抱かれた命であった。

夢と現実と鳥海山噴火

南北に延びる街の幹線道路を北に向けて歩いて行くと、右側には若浜小学校があつて、訪ねた建築設計事務所は校舎に隣接して建っていた。中に入ると、見知らぬ若い二級設計士がおり、奥には旧知のKさんがいた。彼は、リサーチ会社経営のジャーナリストであつたが、いつのまにか一級建築設計士になつていた。

話も終つてそこを出てからいくら歩かぬうちに、北方の山並みが一面の火炎に包まれているのを見て驚いた。それが鳥海山の噴火であることを直感したときには、すでに溶岩流はすぐそこまで押し寄せていた。国道七号線酒田バイパスの路面の二、三方所からは溶岩が烈しく噴き出し、街中は騒然と慌ただしくなり、非常サイレンが鳴りびびっていた。

不思議なことに、周囲には誰ひとり逃げ惑う人が見当たらない。思うように走れない中で私は考えていた。「海へ逃げよう、海なら大丈夫だ。街は全滅しても船で海へ逃げたら何とか生き延びられるだろう」と、必死に走つた：

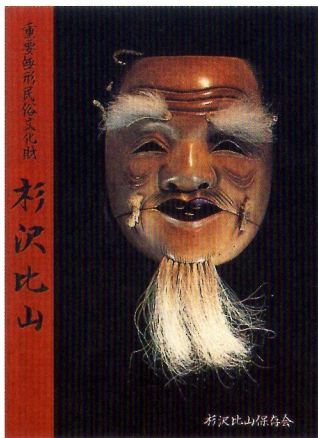
はつと、目を覚ましたときには四時半を回っていた。夢もこれほどまでに現実味を帯びて迫ってくると、恐怖で心臓も早鐘を打つ。ドロドロの溶岩流と激しく天に突き上げる噴火は、淡い黄色とピンク色の火炎となつて、その美しさにも魅せられた。

平成三年八月一五日早朝の夢でしたが、その日の正午過ぎのこと電話のベルが鳴り響き、出てみると「Kです」と言われた。夢の中に出てきた彼であつた。

「今夜のことですが、杉沢の熊野神社で年に一度のお祭りがあるんです。重要文化財の比山芸能で鳥海山の噴火を鎮めるための奉納なんですけどどうですか、行ってみませんか」と、誘いを受けた。

夢の中では一級建築設計士であつたが、電話の主は、職業は違ついてもまったくの同一人物なのである。そして、鳥海山噴火の夢と鳥海山噴火鎮めの比山芸能の話を持ち出されたのである。今朝の夢は、今夜の比山芸能と深く密接に繋がっていた。

夢の中のKさんと本人からの電話。夢と現実、現実と夢。どちらも現実となつて、表裏一体の姿でその魂を紡いでいたのであつた。



翁の能面

夢が現実なのか、現実が夢なのか、この世のあらゆることが見分けがつかなくなってくる。現実が真の現実になっているのだが、そうはっきりいいものかどうかと割れた思いが問いつづけてくる。夢の中の現実も真の現実なのである。

共時性現象を探索する者として、現実が現実で、夢は夢という分け方でもいいのか、と自問する。混沌として、夢と現実が不分離一体のまま、渦の中に投げ出される思いが続く。

いのちが生んだ双子、物性と心性（霊性）が、あたかも宇宙創成期とでもいうようなカオスの中に投げ出される思いに立つ自分。だから、いのちの双子の物性と心性が、互いに混沌のソウル雲海（心靈磁界）に生きているときは、夢（心性）も現実（物性）も一緒の世界にある姿ではないかと思うのである。

奥深い、いのちの物心両性の双子、それが物的現実化したとき、それは、この目で見える物的現実として見ることができ。これが、意識する現実といえる。ところが、夢で見ている現実（夢の世界）は、これま

夢はいのちの子
 現実もいのちの子
 一卵性の双子です
 夢と現実が双子です
 一卵性の双子です
 心も体もいのちの双子
 夢は心性（心）で
 現実が物性（肉体）で
 一卵性の双子です
 分離できない双子です
 あるときは夢で
 あるときは現実で
 表裏一体の双子です
 いのちが生んだ双子です



比山芸能（重要文化財）の舞台（熊野神社）

た心で見ているれつきとした混沌不離一体の物心両性の世界で、共振共鳴が起こり、心性から心に変った心的現実としてとらえることができるし、これが夢の現実と考えて何の不思議もない。

だから夢も現実も、いのちから見れば、どちらも、生命エネルギーの具象化した姿と
いうことになる。

夢も現実も縦糸と横糸で紡がれている織物のようであって、その糸は、密なる意志性の伝達の糸であり、共振共鳴の原動力となるのではないか。

この世は自分の魂形成の宿念エネルギー。それ以前は自分の魂形成の本念エネルギー。われわれの、祖先累々の、引き継がれてきた魂（生きさま）。五代くらい先までは分かりやすいものの、それ以前の魂は闇の中。一〇代さかのぼれば約三百年、一〇二四人の先祖集団となり、四〇代さかのぼれば約一二〇〇年、一一〇〇億人強の魂が関与した自分。それ故に、五代以前（一五〇年位）の魂を総括してソウル雲海（心霊磁界）と呼びたい。そこは全生命の魂が、宇宙の果てまでも含めて、混沌とうごめく心霊磁界だ。宇宙運行から単一生命（自分）運行までもかかわってかぎりない世界。運命は自分の心で紡ぎ出す。

いのちあるかぎり、いのちの結びに切れ目はない。あの世もこの世も天地万物、虚（夢）も実も、すべてが真実の中で、心の糸で結ばれる。

夢は現実

現実 は 夢

どちらも現実

夢は無意識の現実

現実 は 意識の現実

夢も現実もどちらも現実